

識に服せしことも多けれども、また疎漏の説もあり、後藤吉益等の書は、いまだ讀まざれども佳説もあるべし。略註病は丙の字なりといふ説、輟耕錄に見えて妙なり、今ことごとく記せず、人は一氣の陽もて生存す、この陽常ならざれば病なり、強人さむくして振ふも、弱人の寒になやむも、皆陽氣の變にて、證に寒熱といふは枝葉の論なり、療治にいたりて、或は温、或は涼、或は發散し、或は收瀉するは、療治の手段にて、こゝにいふをまたず、

〔春波樓筆記〕余江漢曰く、人薄弱にしてつねに寒風にいたむものあり、愈身を掩うて養ふ者益感ず、氣を張りて病内に入らず、旅中必病者少し、氣の充つる故なり、

〔技癢錄一〕神心内守

本藩平岡氏、世傳兵術、其祖八左衛門、術尤稱神捷、嘗語人曰、吾中年後、兵術差進、而無它可證、但不復得外感之病、蓋此心機警守無少弛縱、故然也、素問曰、恬澹虛無、真氣從之、神心内守、病安從來、平岡氏之謂也、或曰、兵士達者、自有道機、蓋所謂進於技之類歟、

〔皇國醫事沿革小史後編第六期〕當時弘化又京師ニ廣瀨元恭アリ、大坂ニ緒方洪庵アリ、并ニ洋學

醫術ヲ以テ鳴ル、元恭ハ甲斐ノ人、京師ニ帷ヲ垂レ、大ニ究理學ヲ講ジ、徒ヲ聚メテ教授ス、我國物理學及ビ生理學ノ興ルヤ、元恭最モ力アリト云、元恭大ニ著書ニ富ム、乃チ理學提要、究理對

問、人身究理、牛痘奇方、知生論、及ビ三物名義、地理誌、諸器圖解、炮術新書、解剖詳辨、病理正解、養生俗辨、外科指南、西洋馬術說等アリ、洪庵諱ハ章、字ハ公裁ハ備中ノ人、江戸ニ到リテ坪井信道ニ從學シ、

傍ラ宇田川玄眞ニ就テ疑ヲ質ス、後又長崎ニ遊ビ、學就テ大坂ニ徙リ、始メテ業ヲ開ク、名聲籍甚、生徒雲集、治ヲ乞フ者門ニ填ツ、弘化四年紀元二千七百七年病學通論ヲ譯述シテ、病因病證ヲ説ク、之ヲ病理學ノ首唱トス、又扶氏經驗遺訓ヲ譯シテ、大ニ醫學ノ功ヲ進ム、

〔先哲叢談後編五〕山脇東洋略中